

巻頭言**新年のご挨拶**

—国の将来像を選択する年—

辻 靖 三



新年明けましておめでとうございます。謹んで新年のお祝いを申し上げます。

近年は毎年毎年、社会経済に大きな出来事が生じ、一国内のみならず地球規模に波及してきています。その中でも、昨2011年は有史以来最大の災害、東日本大震災が日本で発生しました。大津波による甚大な被災と福島原発の広範な被災は世界中に発信され、日本における災害の恐ろしさを強烈に印象付けた年でした。災害の実像と、それに立ち向かう日本人の行動も注目されつつ、年を越えました。

近年の日本は有数の先進国の一角に位置付けされてきましたが、国内的には高齢社会下で、発展途上国含め世界の中で厳しい産業経済の競争の渦中です。国の仕組みも様々な課題が山積し、社会経済は行き先定まらずで迷走している感があります。そのさなかに大震災が覆いかぶさってきました。まさに国難ともいべき状況です。

本年2012年は、衝撃の2011年から、いかに立ち上がることができるのか、日本の将来の大きなターニングポイントの年ではないのかと思います。これまでの日本の大変革は、明治維新と終戦後とされています。両者とも国の体制そのものの大変革時期でした。世界の中で独立国として生き延びて名誉ある位置を占めるために、混乱を乗り越え新しい国を作ることができた歴史とでも言えるのでしょうか。当然社会的にも、経済的にも摩擦があった中で、国と国民の将来の発展を目

指して、営々と努力してきて得られたのが現在の国となりました。

しかし、今回は先進国の成熟した国として迎えた局面で、これまでのように外からの強い要因に起因するものでなく、内在している様々な懸案が交錯している中で新たな進路を見出すことができるのかという場面だと思えます。成熟社会であり価値観が多様で百家争鳴です。周囲は地球を舞台とする政治、経済、環境等総合的な国家間の合従連衡を含めた生存競争です。これらの与件の下で、一つの国として、将来に亘って国民が生活し活動していける国に脱皮できるかが今回の節目に問われていることだと思えます。

様々な主張があり、利害が輻輳しているが、永続的に民主主義国家として存立していくにはしっかりとした基盤を持ち、自立できることが前提となるのは論をまちません。このような状況の中では、一つの個別の案件の度に議論をしていき部分最適の選択でよいのか、国家全体をみての全体最適を選択するのか、また、現時点での現在選択なのか、将来の国家、国民を見据えた最適を選択するのか、大きな分岐点です。どちらを決断し、説得し、実行して行くのか、それでこれからを担う世代の人たちに日本の未来を託していくことができるか、全体的、将来的な判断をするべき年がスタートしました。